参考資料3

「専門職を対象とした認知症に関する意識調査」調査結果について

1 調査目的

令和６年１月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」により、都道府県・市町村に対し計画策定が努力義務とされたことから、今後の県計画の策定や計画をより充実させたものにするために専門職が認知症に対しどのようなイメージを持っているか把握するために実施する。

2 調査方法等

＜Web 式：回答数５０１＞

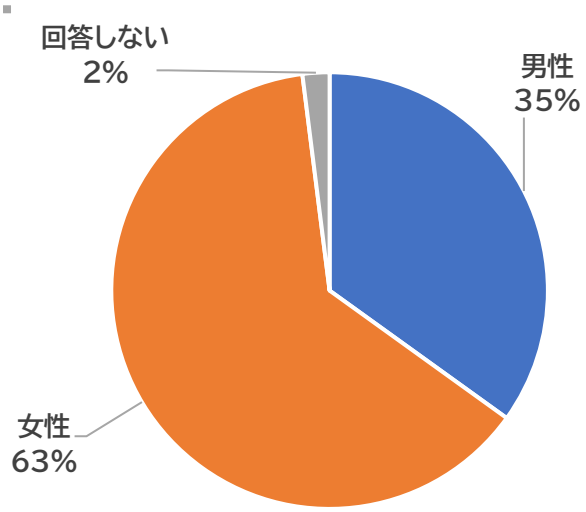
・実施期間：令和８年３月１９日～６月１５日

・実施場所：Web 上（LoGo フォーム）

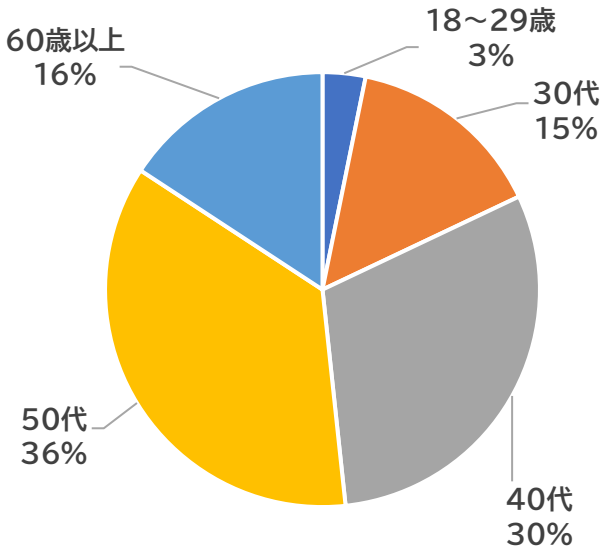
3 調査結果の概要

(1)回答者について

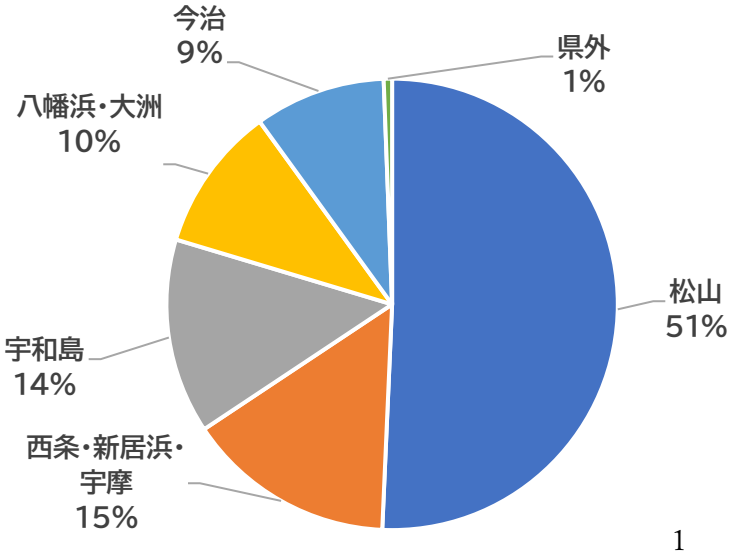
性別



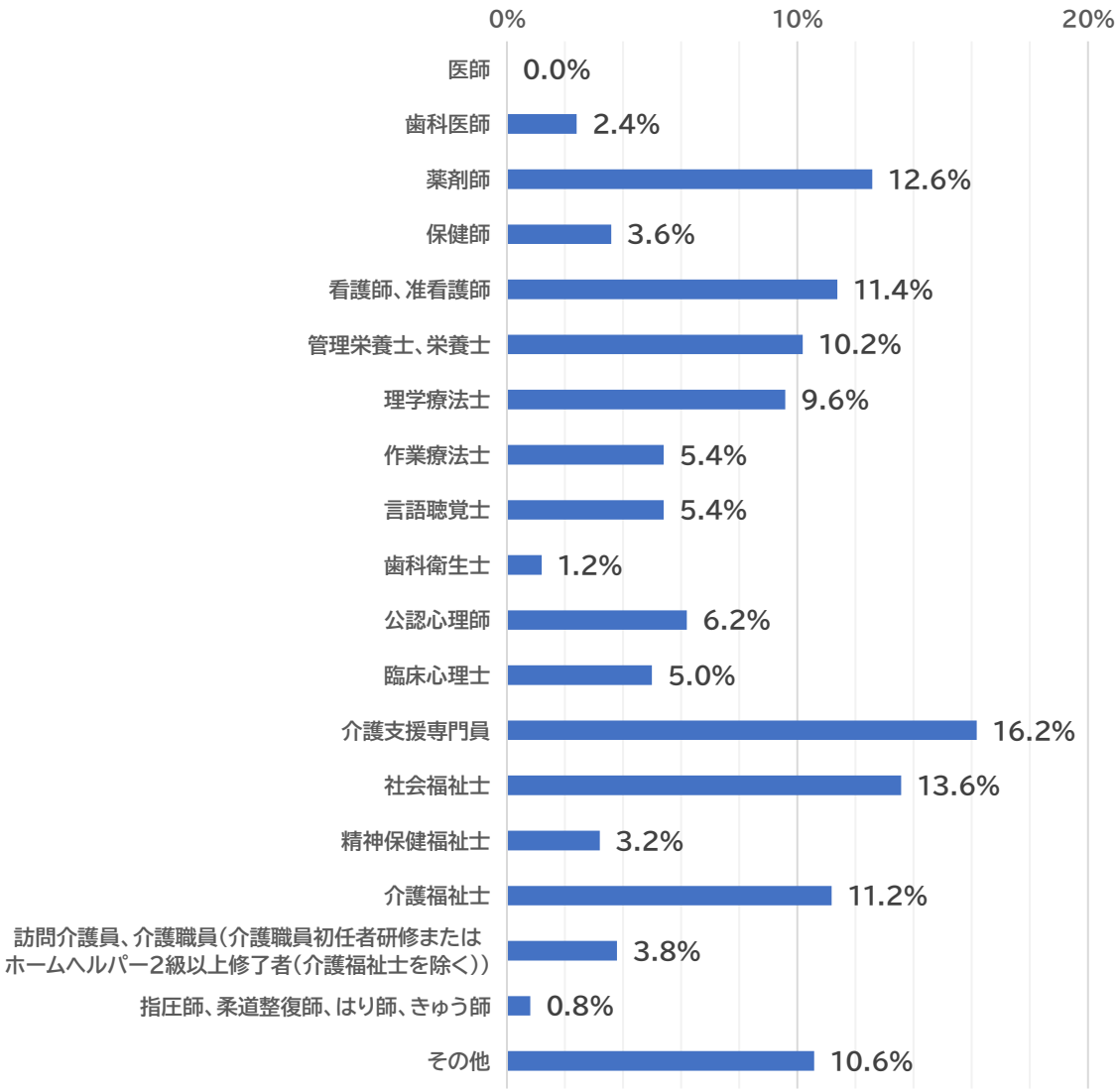
年代



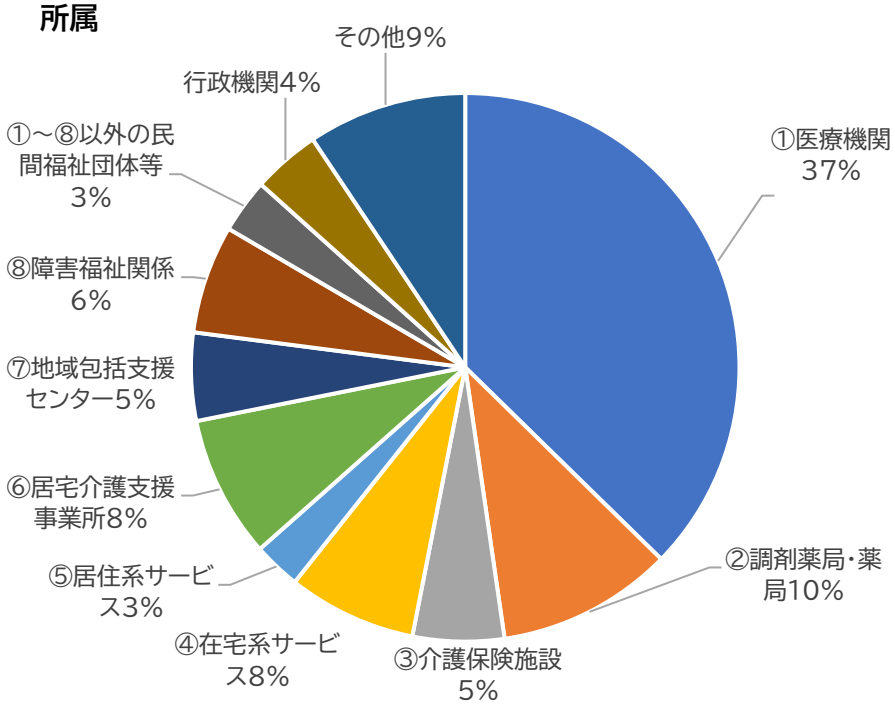
住まい



職種

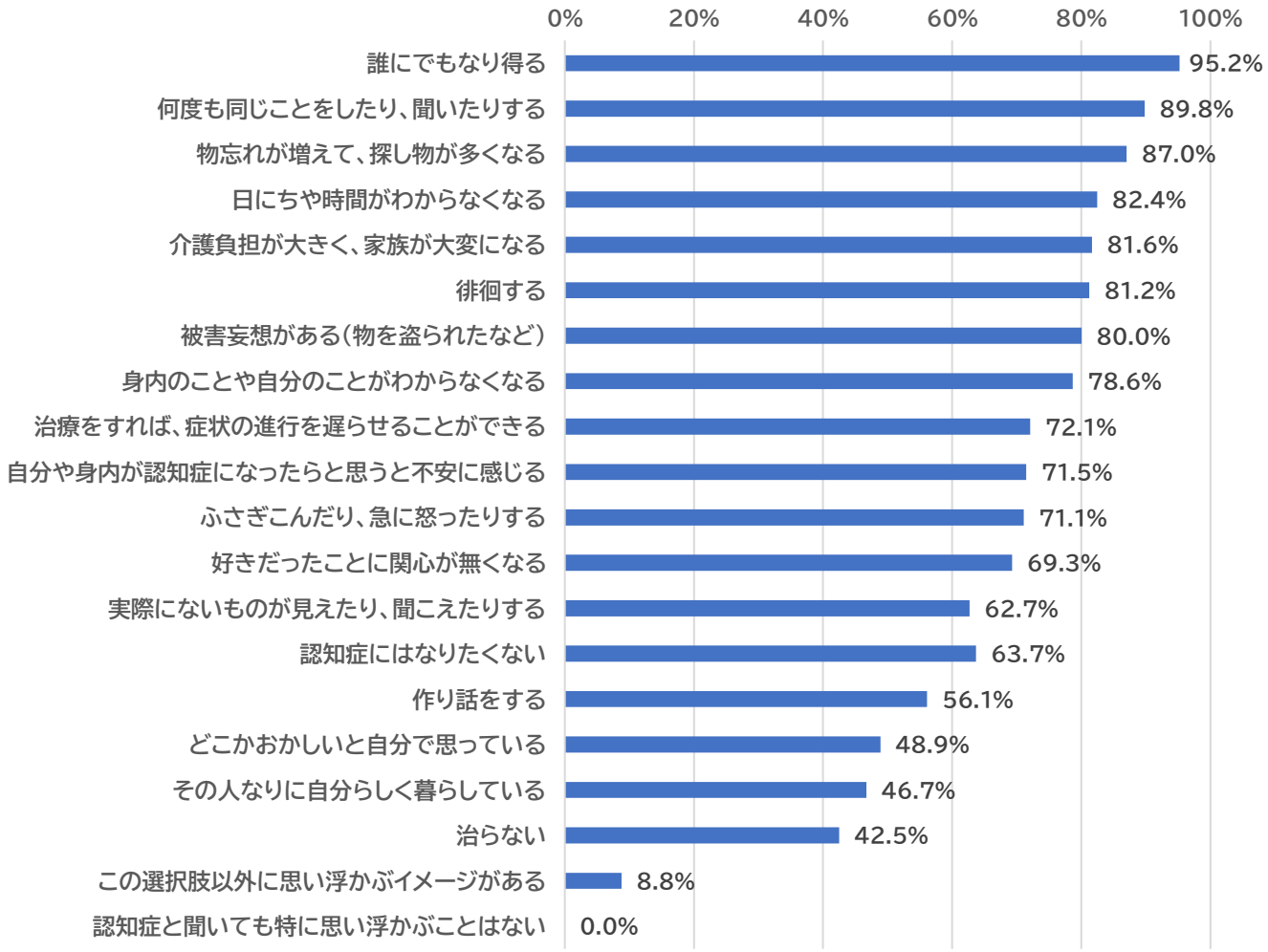

0%
10%
20%
医師 0.0%
歯科医師 2.4%
薬剤師 12.6%
保健師 3.6%
看護師、准看護師 11.4%
管理栄養士、栄養士 10.2%
理学療法士 9.6%
作業療法士 5.4%
言語聴覚士 5.4%
歯科衛生士 1.2%
公認心理師 6.2%
臨床心理士 5.0%
介護支援専門員 16.2%
社会福祉士 13.6%
精神保健福祉士 3.2%
介護福祉士 11.2%
訪問介護員、介護職員（介護職員初任者研修またはホームヘルパー2級以上修了者（介護福祉士を除く））
3.8%
指圧師、柔道整復師、はり師、きゅう師 0.8%
その他 10.6%

所属


その他9%
行政機関4%
①～⑧以外の民間福祉団体等3%
⑧障害福祉関係6%
⑦地域包括支援センター5%
⑥居宅介護支援事業所8%
⑤居住系サービス3%
④在宅系サービス8%
③介護保険施設5%
②調剤薬局・薬局10%
①医療機関37%

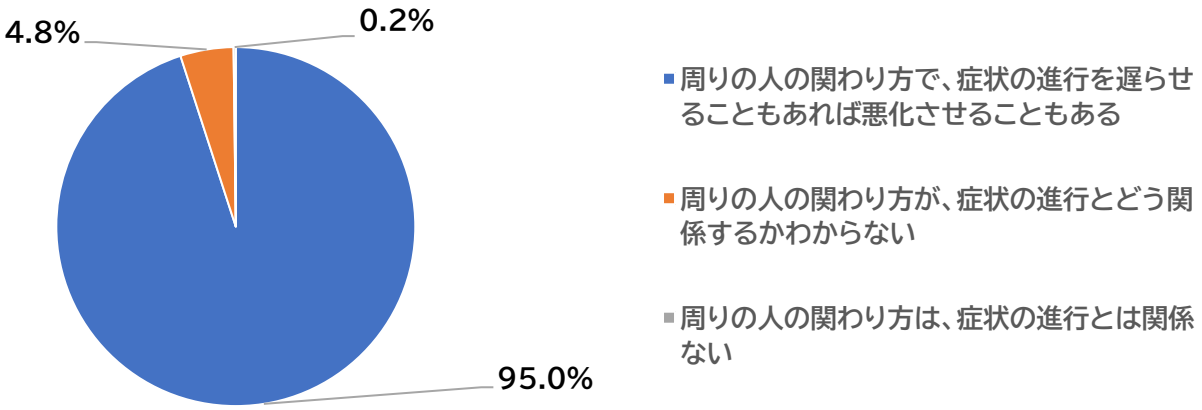
(2)「認知症」と聞いてどのようなことを思い浮かべるか(複数回答)

「誰にでもなり得る（95.2%)」、「何度も同じことをしたり、聞いたりする（89.8%)」、「物忘れが増えて、探し物が多くなる（87.0%)」と回答した人が多い一方、「認知症と聞いても特に思い浮かぶことはない」と回答した人はいなかった。



(3)認知症の人と周りの人との関わり方のイメージについて(単一回答)

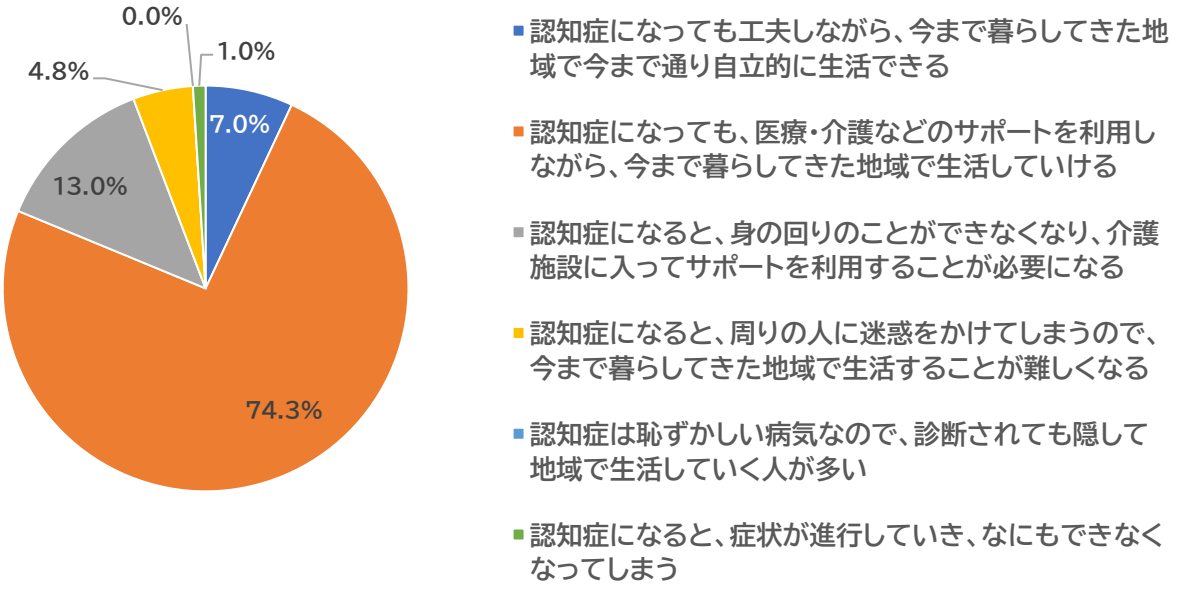
「周りの人の関わり方で、症状の進行を遅らせることもあれば悪化させることもある」と回答した人が 95.0%であった。

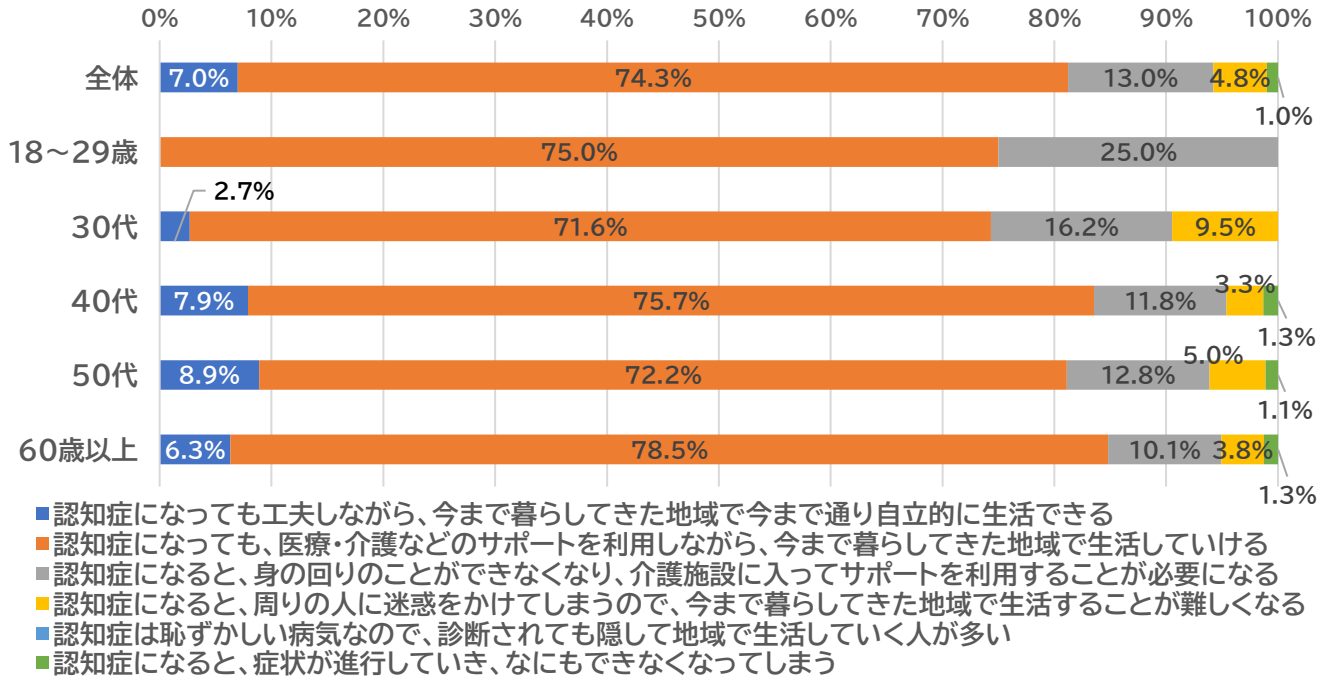


(4)認知症の人が日常生活を送るうえでどのようなイメージを持っているか(単一回答)

「認知症になると、症状が進行していき、なにもできなくなってしまう」というイメージを持っていると回答した人は 1.0%であった。一方で、「認知症になっても工夫しながら、今まで暮らしてきた地域で今まで通り自立的に生活できる(7.0%)」と「認知症になっても、医療・介護などのサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活していける(74.3%)」を合わせると 81.3%となった。「認知症は恥ずかしい病気なので、診断されても隠して地域で生活していく人が多い」はいなかった。

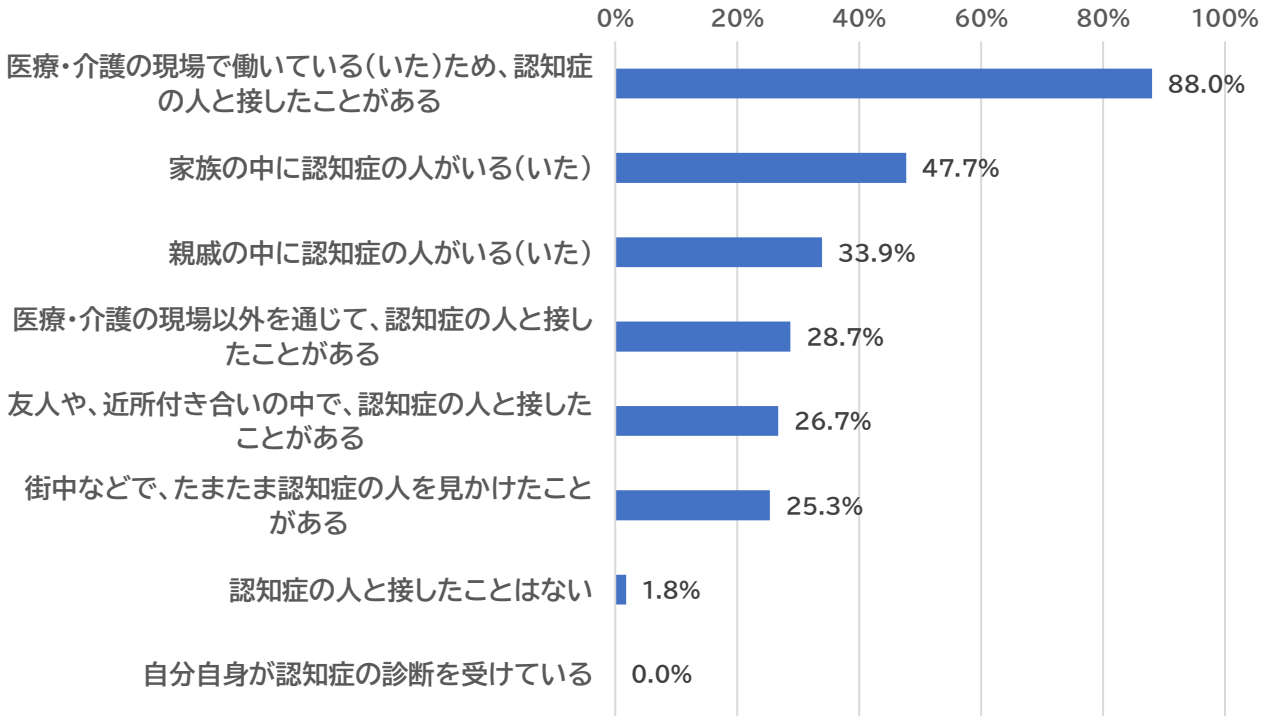
年代別にみると、「今まで暮らしてきた地域で生活できる（していける)」イメージと回答した割合は、60 歳以上の 84.8%が高く、最低は 30 代の 74.3%であった。





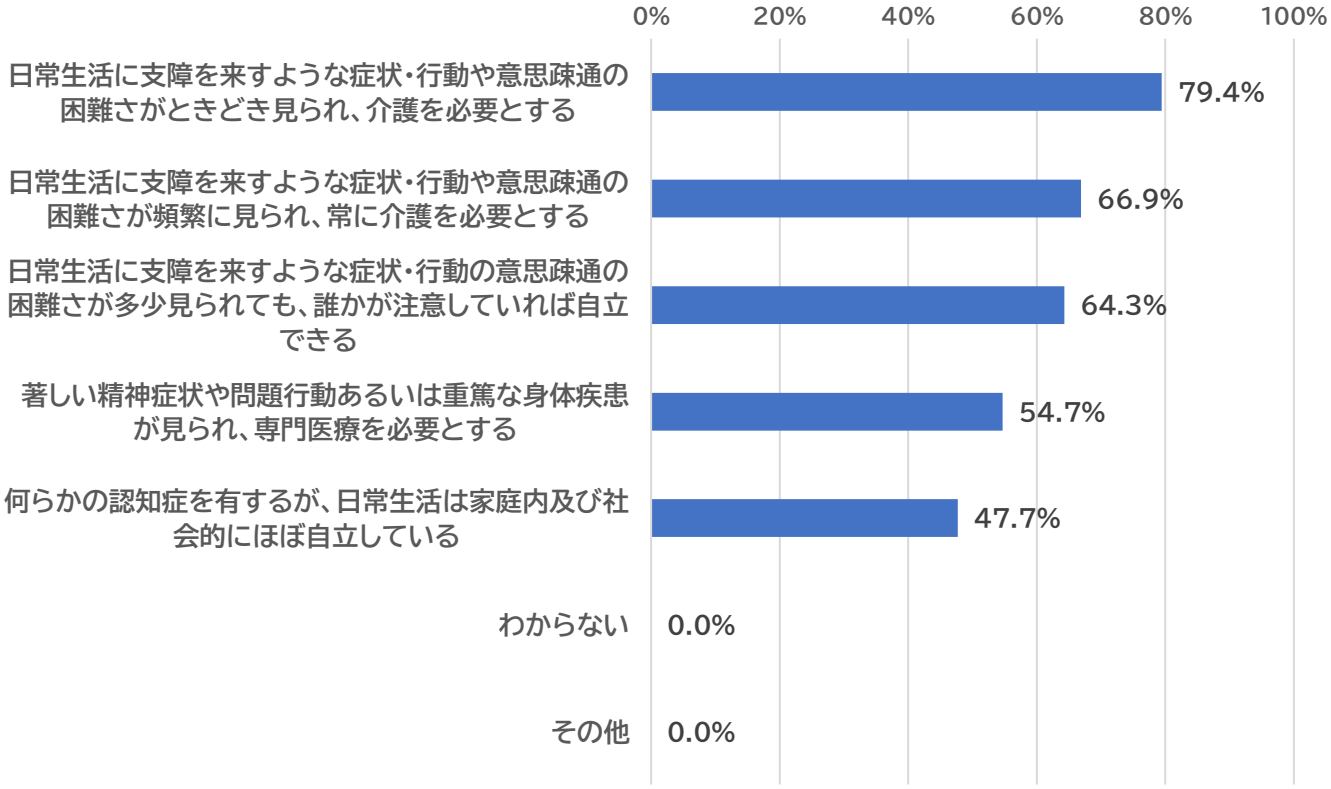
(5)今までに認知症の人と接したことがあるか(複数回答)

「認知症の人と接したことはない」と回答した人は 1.8%であり、全体の９割以上が今までに認知症の人と接した経験があった。



(6)収入を伴う医療・介護・福祉にかかわる仕事の一環として接したことがある認知症の人の状態像は(複数回答)

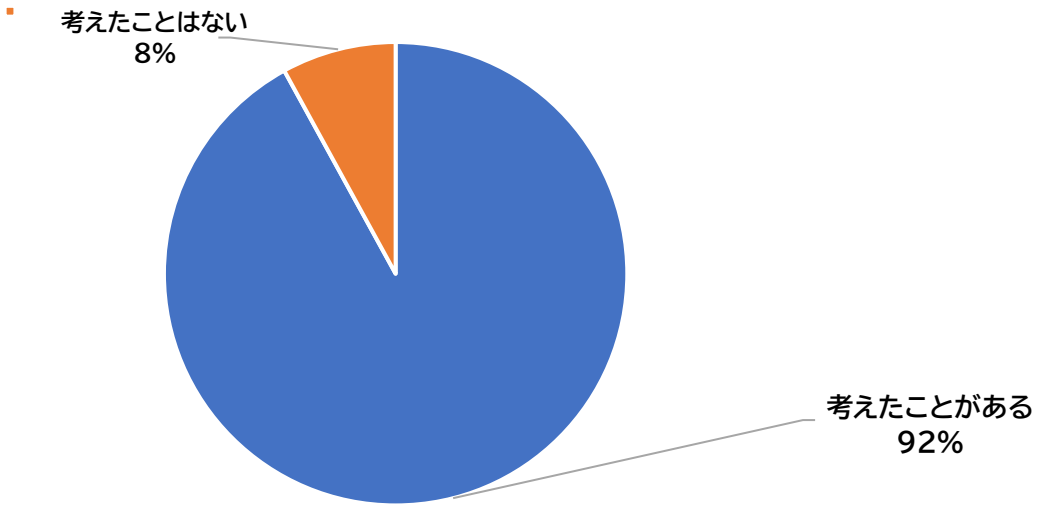
「日常生活に支障を来すような症状・行動や意思疎通の困難さがときどき見られ、介護を必要とする」と回答した人が一番多く 79.4%であった。

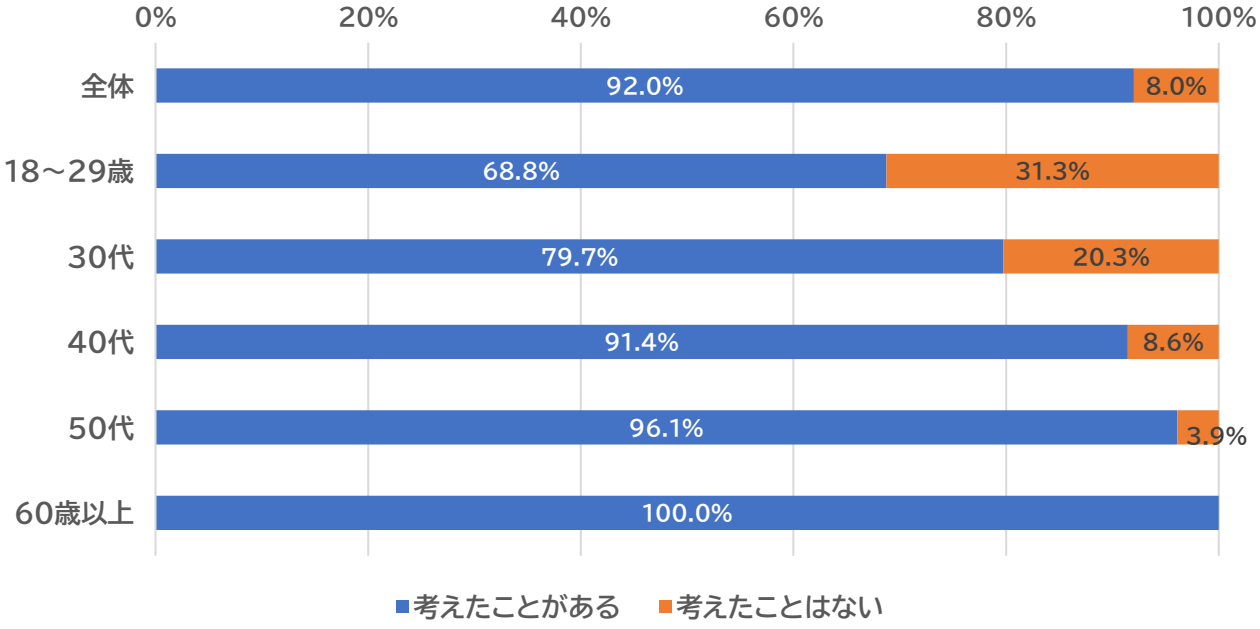


(7)今までに自身や家族が認知症になった時にどうしたらいいのか考えたことがあるか(単一回答)

認知症になった時にどうしたらいいのか「考えたことがある」と回答した人は 92.0%であった。

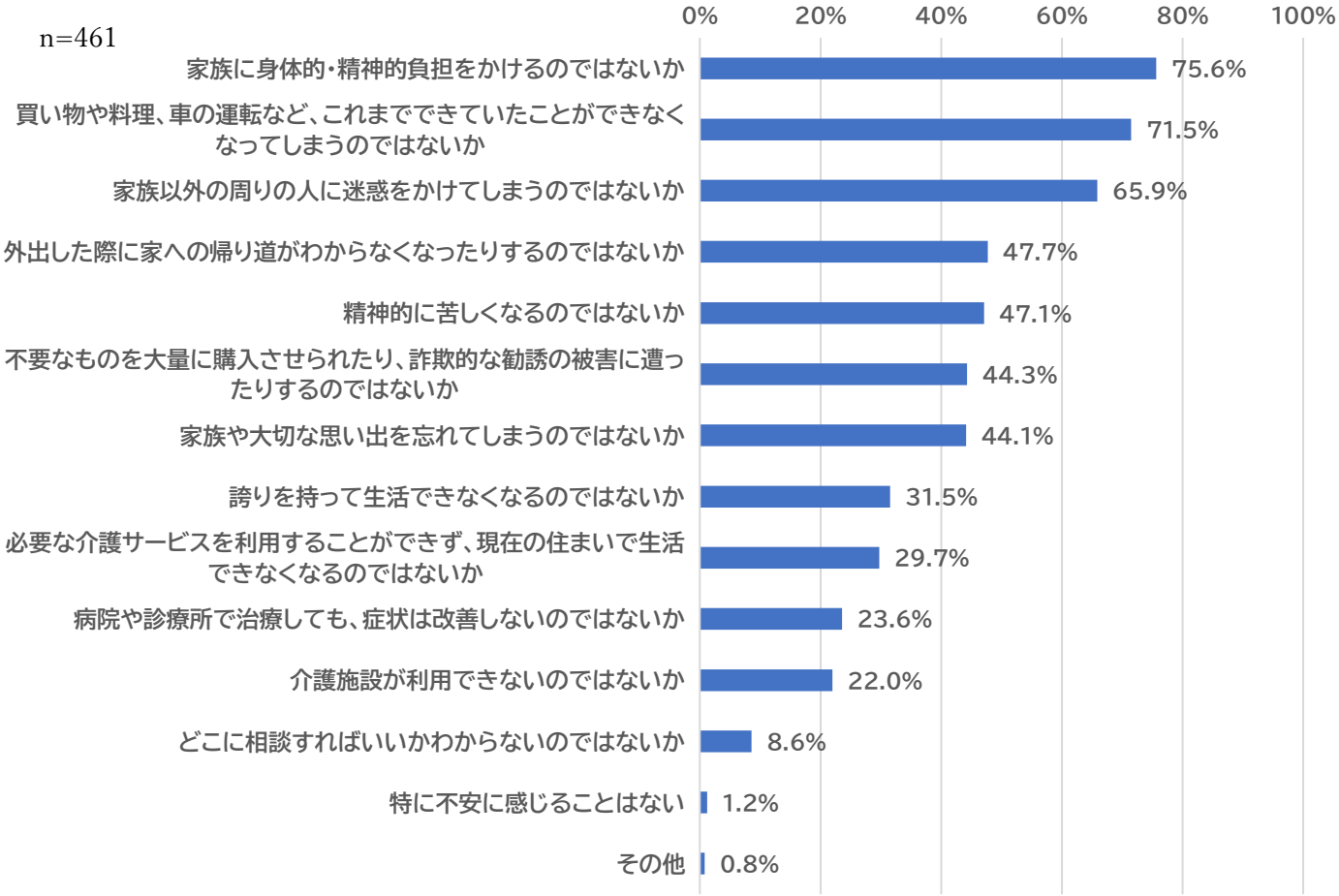
年代別にみると、「考えたことがある」と回答した割合は、60 歳以上は 100%であった。





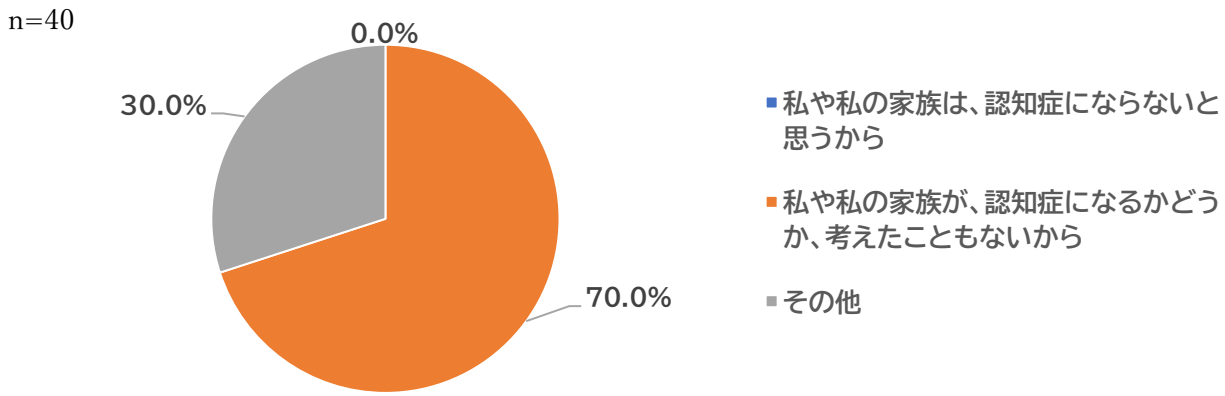
(8)もし、自分や家族が認知症になったら、どのようなことに不安を感じると思うか((7)で考えたことがあると答えた方対象)(複数回答)

「特に不安に感じることはない」と回答した人は1.2%であり、回答した人のほとんどが、何かしらの不安を感じていた。不安に感じることとしては、「家族に身体的・精神的負担をかけてしまうのではないか（75.6%）」が最も多く、「買い物や料理、車の運転など、これまでできていたことができなくなってしまうのではないか（71.5%）」が続いた。



(9)自分や家族が認知症になったらと考えたことがない理由は何か((7)で考えたことがないと答えた方対象)(単一回答)

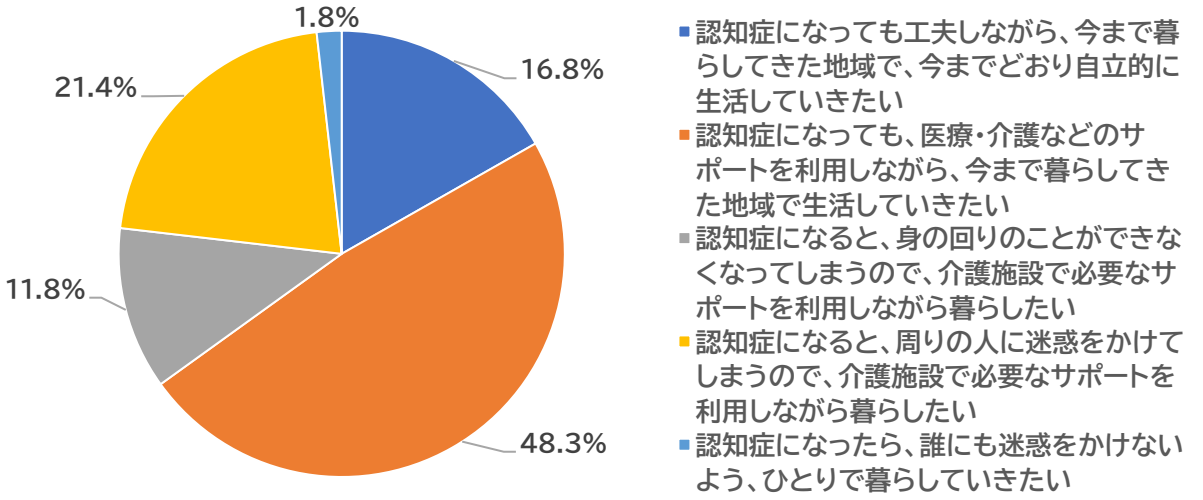
70.0%の人が「私や私の家族が、認知症になるかどうか、考えたこともないから」と回答した。

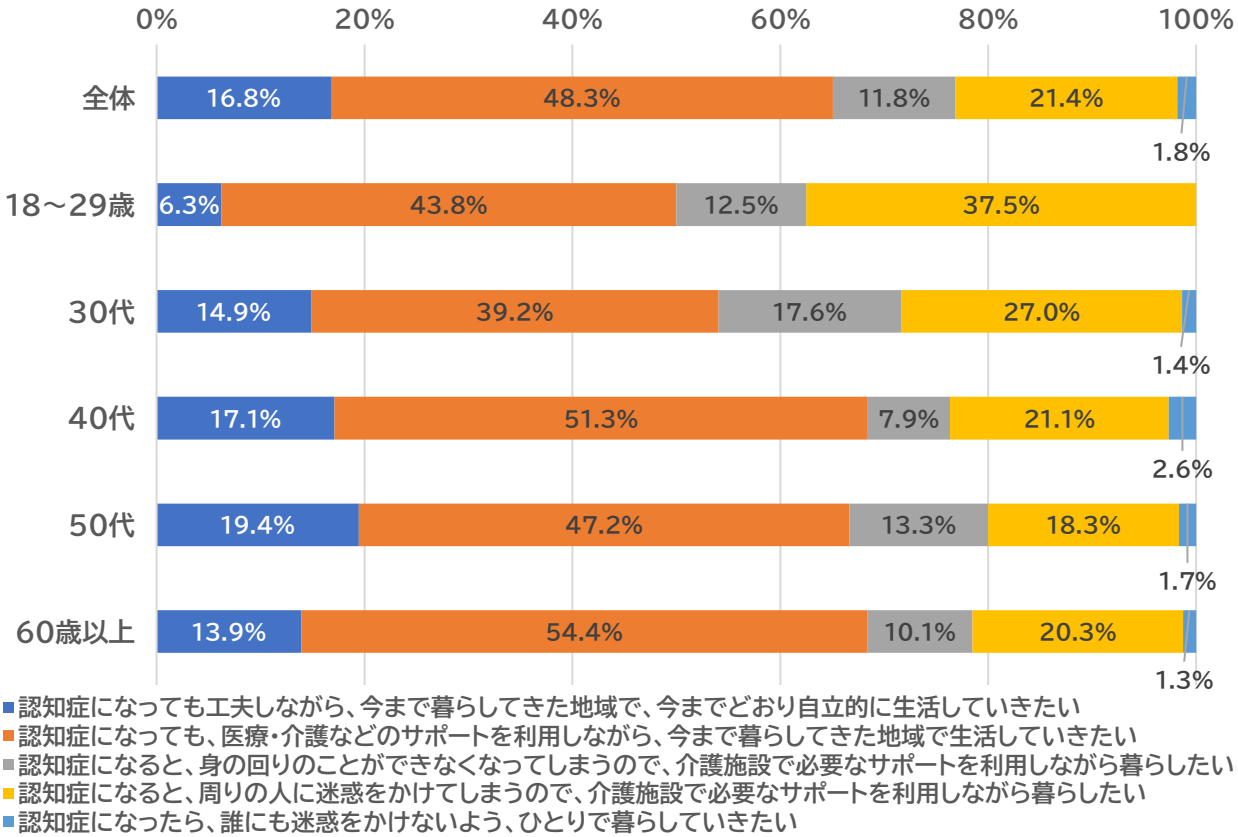


(10)認知症になったとしたらどのように暮らしていきたいか(単一回答)

「認知症になっても、医療・介護などのサポートを利用しながら、今まで暮らしてきた地域で生活していきたい」と回答した人が 48.3%で一番多く、「誰にも迷惑をかけないよう、ひとりで暮らしていきたい」と回答した人は 1.8%であった。

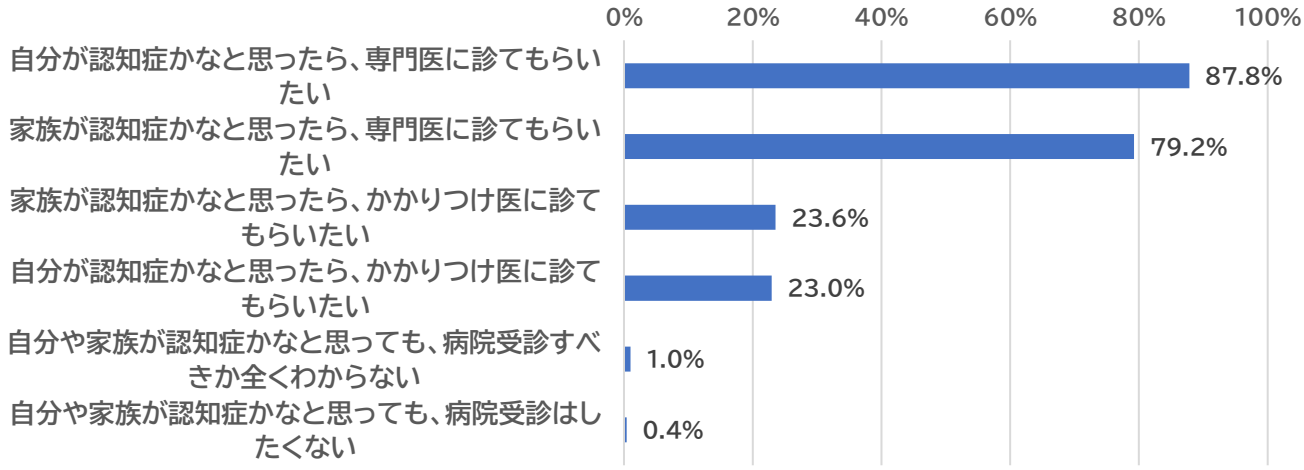
年代別にみると、「介護施設で暮らしたい」と回答した割合は、18～29 歳（50%）が高かった。





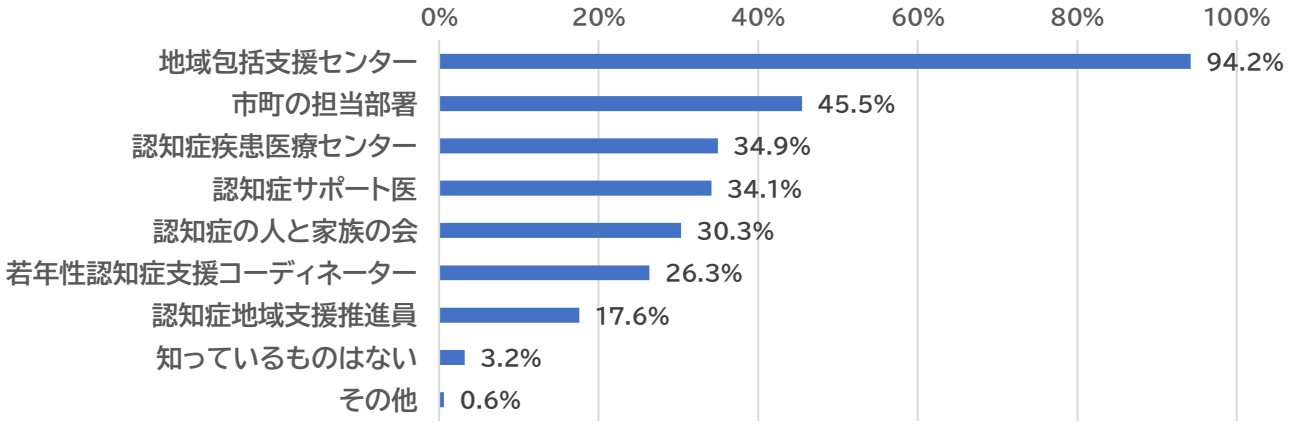
(11)自身や家族が認知症になったとしたら、病院受診することに関しどう考えるか(複数回答)

「自分が認知症かなと思ったら、専門医に診てもらいたい」と回答した人が 87.8%、「自分が認知症かなと思ったら、かかりつけ医に診てもらいたい」と回答した人が 23.0%であり、家族も含め、かかりつけ医よりも専門医に診てもらいたいと考える人の方が多い結果になった。



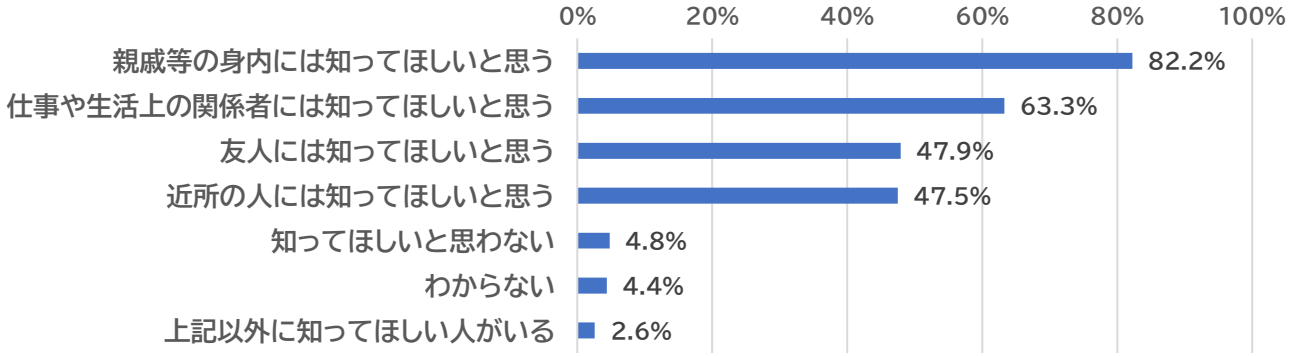
(12)認知症に関する相談窓口について知っているものはあるか(複数回答)

「地域包括支援センター」を知っているとの回答が 94.2%であった。一方、認知症に関する相談窓口について「知っているものはない」との回答は 3.2%であった。



(13)自分や家族が認知症になったことを、周りに知ってほしいと思うか(複数回答)

自分や家族が認知症になった場合、「親戚等の身内には知ってほしいと思う」と回答した人は 82.2%であった。その一方で、「知ってほしいと思わない」と回答した人は 4.8%であった。

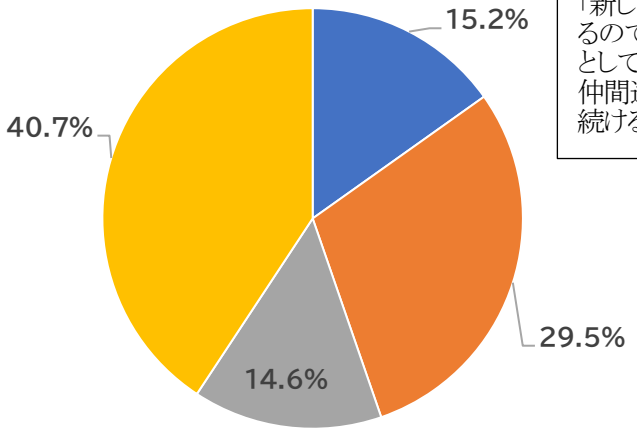


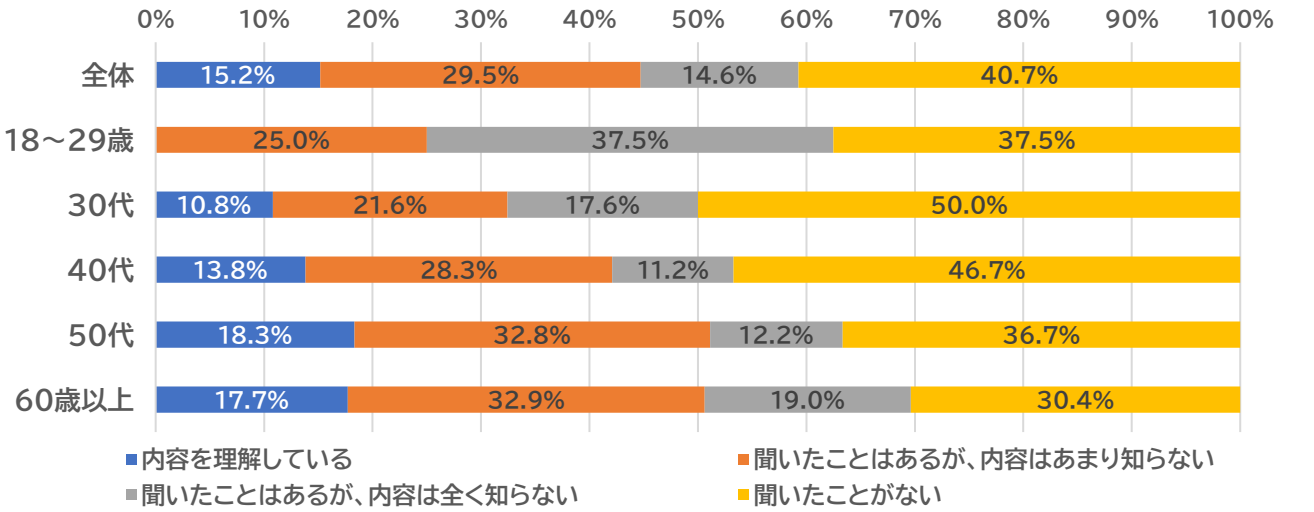
(14)「新しい認知症観」について知っているか(単一回答)

新しい認知症観の認知度は、「内容を理解している(15.2%)」に「聞いたことはあるが、内容はあまり知らない(29.5%)」と「聞いたことはあるが、内容は全く知らない(14.6%)」を合わせても 44.7%にとどまった。

年代別にみると、18～29 歳の認知度は 62.5%と、全体平均より高いが、「内容を理解している」と回答した人はいなかった。

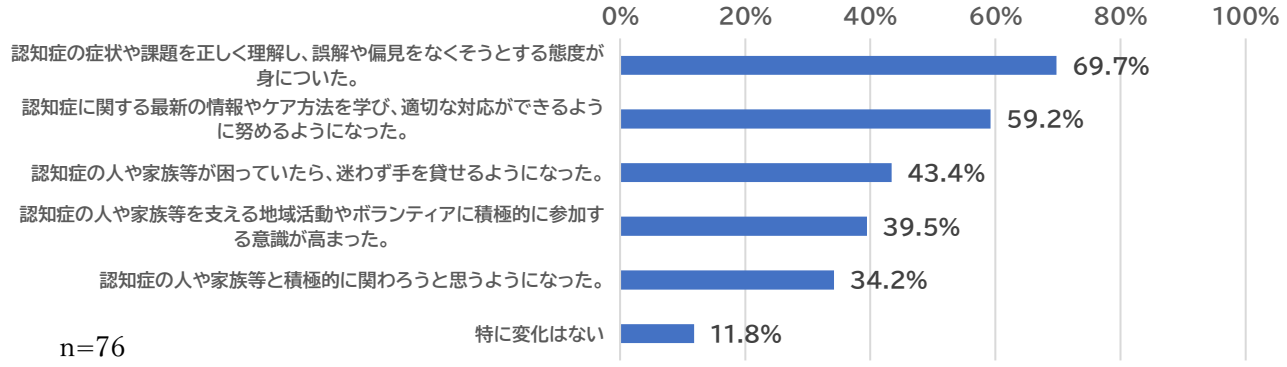
「新しい認知症観」とは、認知症になったら何もできなくなるのではなく、認知症になってからも、一人ひとりが個人としてできること・やりたいことがあり、住み慣れた地域で仲間達とつながりながら、希望を持って自分らしく暮らし続けることができるというという考え方。





(15)「新しい認知症観」を理解した後、どのような変化があったか((14)で内容を理解していると答えた方対象)(複数回答)

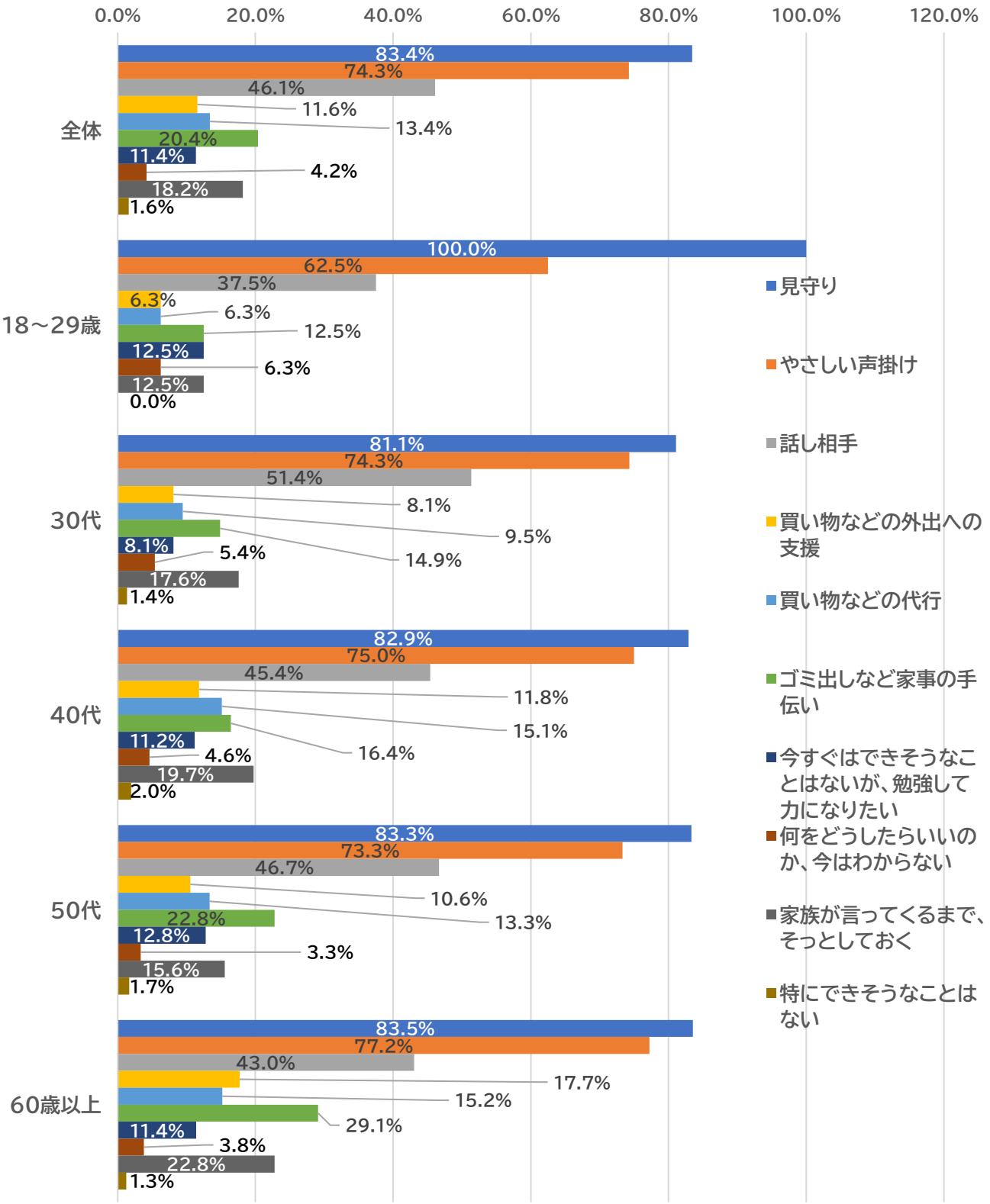
「認知症の症状や課題を正しく理解し、誤解や偏見をなくそうとする態度が身についた」と回答した人は 69.7%であった。



(16)認知症の人が、近所にいた場合、どのような行動ができると思うか(複数回答)

「見守り」が 83.4%、「やさしい声掛け」が 74.3%という結果になった。「特にできそうなことはない」と回答した人は 1.6%であった。

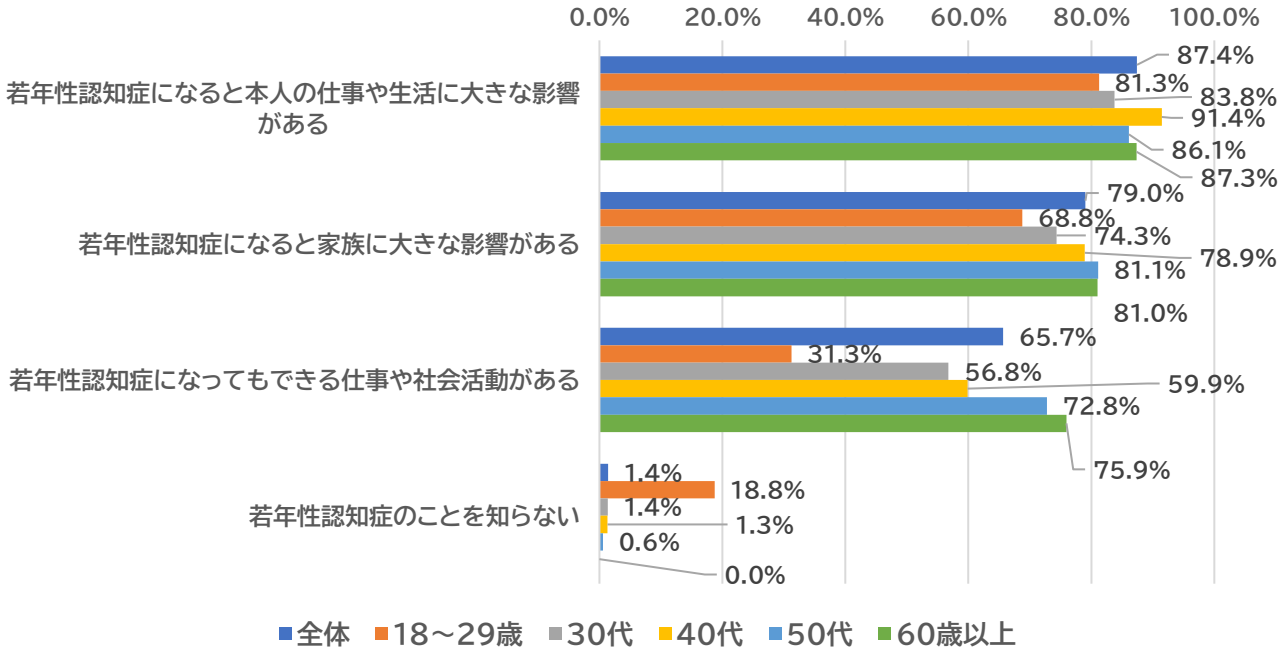
年代別にみると、18～29 歳の 100%が「見守り」ができると回答した。



(17)若年性認知症について知っていることはどんなことか(複数回答)

「若年性認知症になると本人の仕事や生活に大きな影響がある」と認識している人は 87.4%であった。

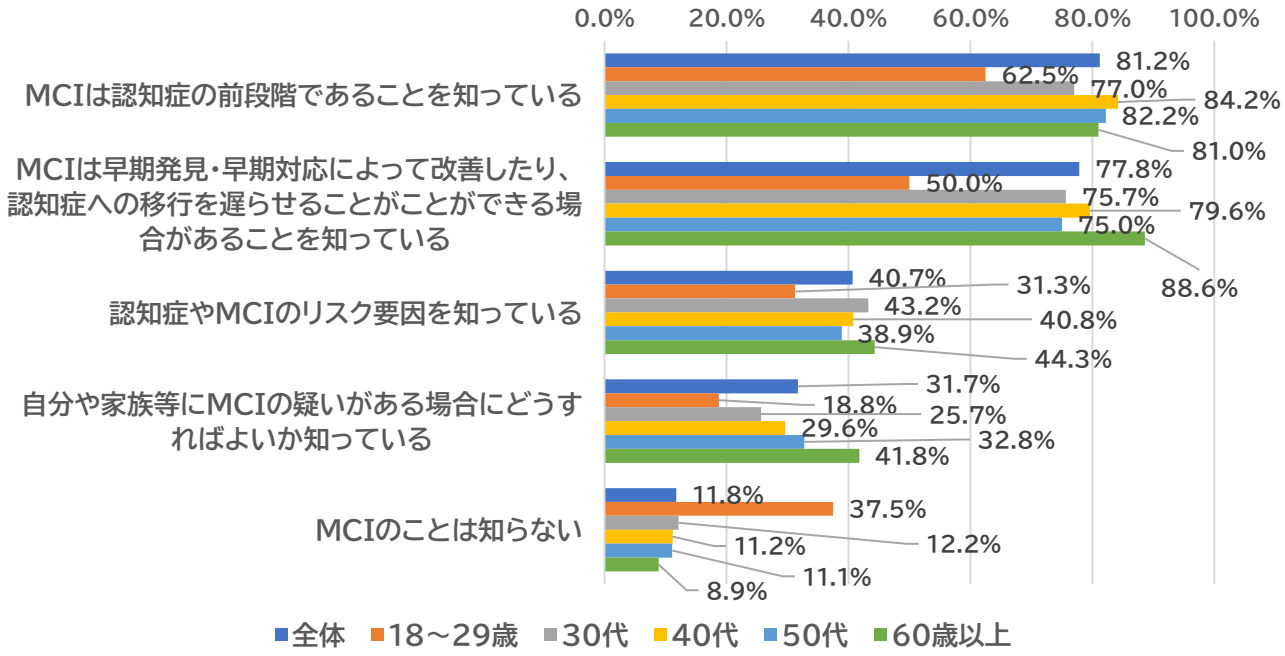
年代別にみると、18～29 歳の 18.8%が「若年性認知症のことを知らない」と回答し、他の年代より高かった。



(18)MCI(軽度認知障害)について知っていることはどんなことか(複数回答)

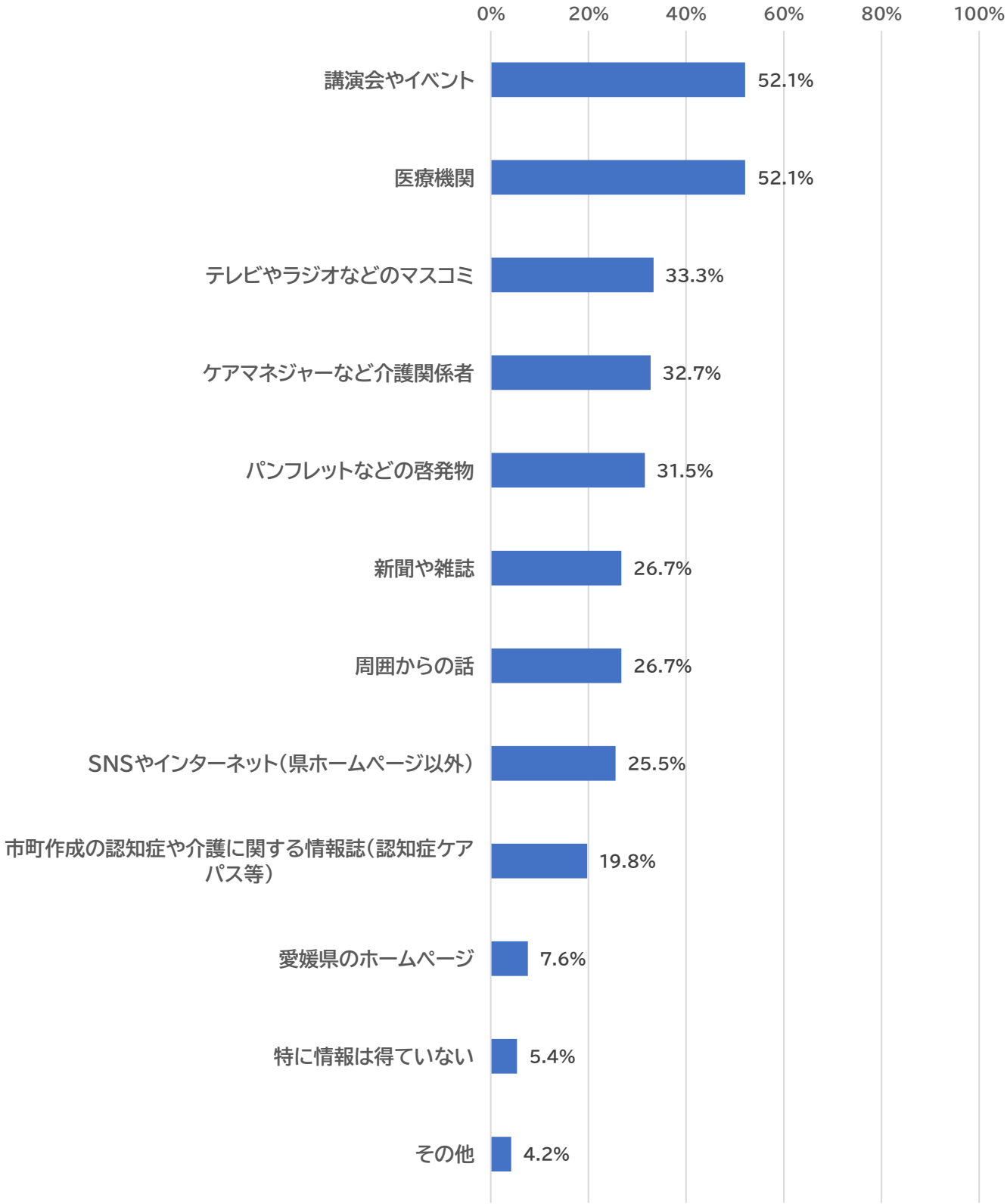
「ＭＣＩのことは知らない」と回答した人は 11.8%であった。

年代別にみると、18～29 歳の 37.5%が「ＭＣＩのことは知らない」と回答し、他の年代より高かった。



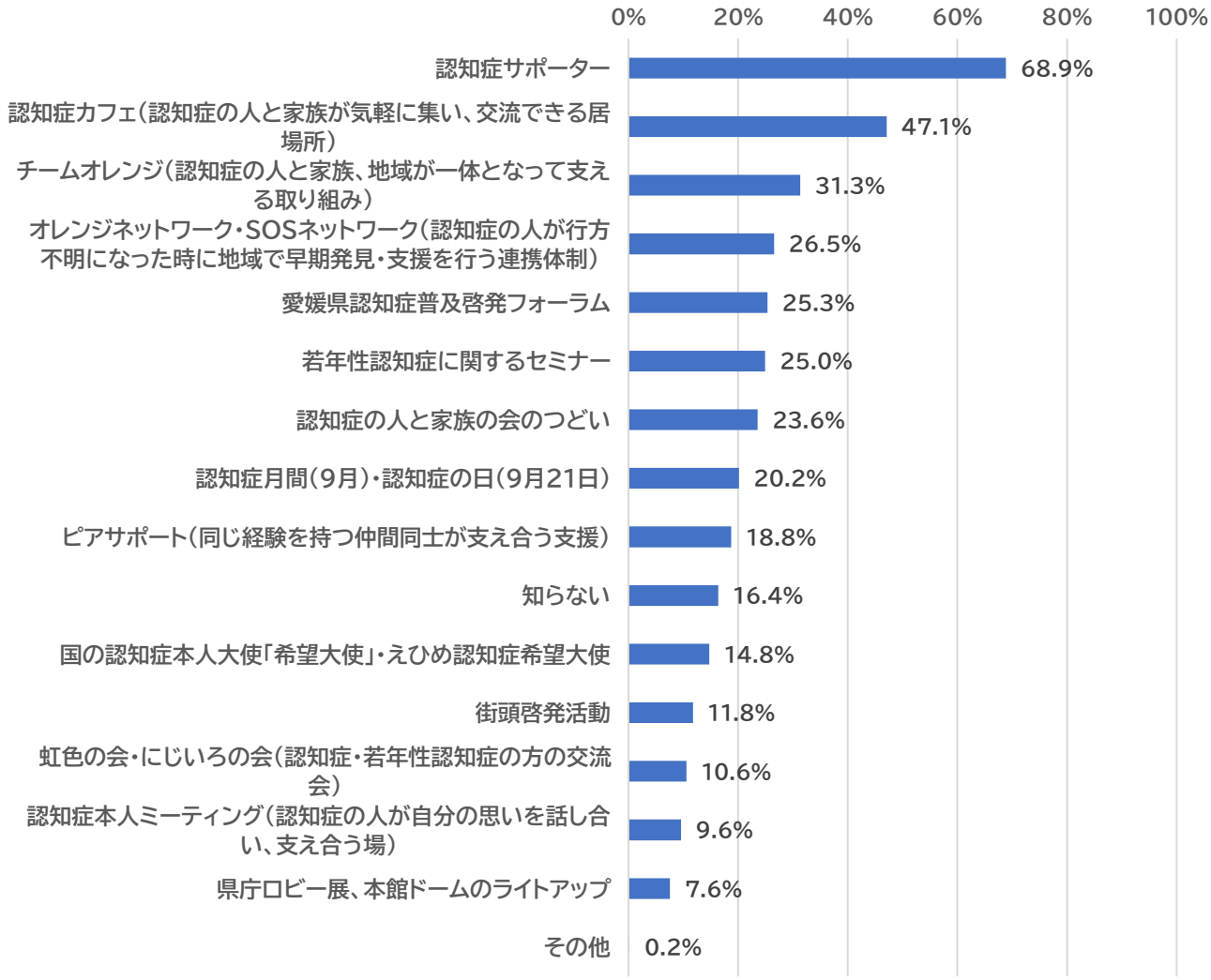
(19)認知症に関する情報を何から得ているか(複数回答)

「特に情報は得ていない」と回答した人が5.4%であり、全体の９割以上は何らかの方法で認知症に関する情報を得ているという結果になった。また、情報の入手手段としては「講演会やイベント(52.1%)」が一番多かった。



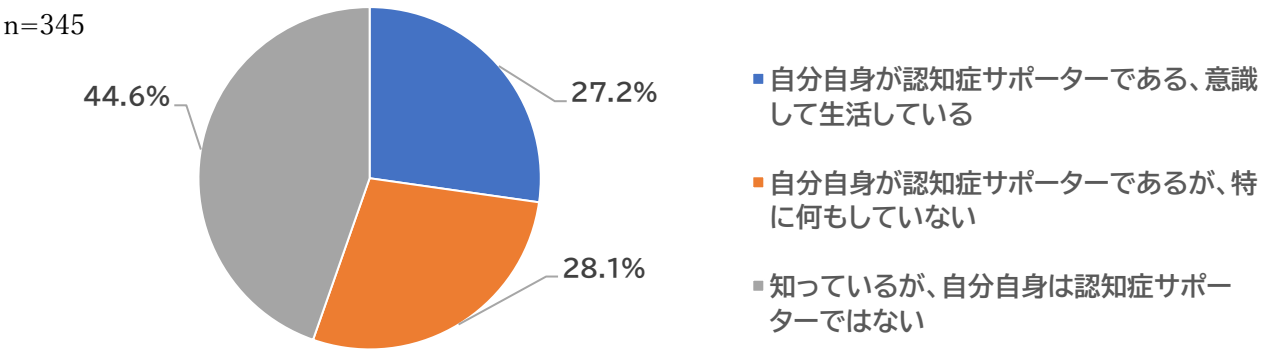
(20)認知症の普及啓発活動で参加したり知っていたりするものはあるか(複数回答)

認知症の普及啓発活動を「知らない」と回答した人は16.4%であった。



(21)19で「認知症サポーター」を知っていると答えた方にお聞きします。「認知症サポーター」を知っていますか(単一回答)

認知症サポーターを「知っているが自分自身は認知症サポーターではない」と回答した人は44.6%、「自分自身が認知症サポーターであり、意識して生活している」と回答した人は27.2%であった。



（22）認知症に関する知識や対応方法を学ぶ機会はありますか。（単一回答）

認知症に関する知識や対応方法を学ぶ機会が「ある」と回答した人は 82.0%であった。

